

2016冬

こがらしのしおり



まえがき

タイトルを決めるのに数時間の四苦八苦。最初はまともだったのにどうしてこうなったのか、過去の自分たちに問うてみたいと思っただのがこの文を書く一時間前のことだったり。

このサイトを訪れ、そしてこのページを開いてくださった皆様、おはようございます。今回まえがきを担当しております、現代視覚文化研究会、通称「げんしけん」の小刀という者です。げんしけんというのは……たしかこのサイトのホームに載ってるはずなのでそこを見てください、ハイ。

さて、書く事が思い浮かばないぞ。と考えたところで、

「いや、こんなの（冬の会誌なんて）初めて見たぞ」

という声が飛んでくるのは間違いないわけだ。まあ結論から書くと、「夏とか冬とか暇なんだしき、この時期も何か作って出そうよ」えらいひとのこの発言が全ての始まりでした。

皆様がご存じかどうかは分かりませんが、実は奈良高専げんしけんは今年で誕生十周年を迎えました。おめでたいことです（まあ部員ほとんどが知らなかつたけど）。それに加えてのサイトリニユール、これはもう何かやろうぜ！ って空気になるのは自然な事だ。「既存の作品だけじゃなくて新しい作品載せようよ、特にイラストと小説の人」

という、これまたえらいひとの発言でこの会誌を作ることとなった

わけです。

最初はどうかとも思いましたが、

「ネットだから紙代（＝ページ数）気にしなくていいじゃん！」

「ネットだからカラーでも問題ないじゃん！」

と、ふたを開けてみれば結構出来ることって多いんですね。びつくりしました。そして調子に乗って長い小説書いて苦労する羽目になるまでがいつもの流れです

とまあそんなこんなで、紆余曲折ありながらも完成したげんしけんの冬会誌。秋や春とはまた違った姿を持つこの「こがらしのつき」ぜひ楽しんでいってください。

あと肩こりとか目の疲れには気をつけて下さいね。

小刀

目次

小説

不思議な話 ————— 4
ちげ

硝子細工の御守 ————— 6
小刀

イラスト

Cloude ————— 18

19 ————— ぶっちー

猫にゃん ————— 20

21 ————— クロム

小說作品



不思議な話

ちげ

……今日は夢を見た。

どんな夢だったかもう覚えていない。確か怖い夢だったような気がする。汗をびっしょりかいて寝起きが悪かったからだ。

起きた直後に、その夢の内容を覚えていたという記憶はあるのだが、今では何かぼんやりしたものに変わっている。だが、数分も経てばその内容は頭から完全に消え、数日後には夢を見たことすら覚えていない。全く不思議な話だ。

——トイレを済ました私は出かける支度をする。

人は寝ることによって休む。寝ることによって成長し、脳をリセットする。では夢とは何か。何のためにあるのか。

そう考えた時、夢の世界の記憶を、起きる前に脳が急いで消しているように、私は思えてならない。寝ている時の世界というのはもっとはっきりしたものなのではないか、実際は起きている世界と寝ている世界はそれぞれ同等の存在であって、起きている世界の時には寝ている世界を忘れ、また逆に寝ている世界では起きている世界を忘れるのではないかと。

……ということは人が休む、寝るというのは人間の脳の意識下で

は、「寝ている世界で活動している」ということだろうか。対象的に、人が起きているというのは脳の意識下では、「寝ている世界で休んでいる」ということになるのだろうか。

全く理にかなっていない話であるが、夢で見たことを思い出すと、それが異世界を垣間見ってしまったような気分になることがあるのだ。

——電車はまだ来ない。どうやら遅延しているようだ。

夢の中で、これは夢だと自覚できている夢がある。それは現実と比べて夢がありえないものだ。時などに感じたりする。

寝ている世界の中で起きている世界を覚えているということだ。それもすぐに消えてしまう記憶の一つなのだから、起きている世界で夢の世界を覚えていることに似ている。

——電車はホームに到着する。私は改札を出た。

また他にも変なことがある。

ある時私は夢で、何か立派な芸術作品を見た。夢の中でそれはオブリジェクトとして現れていて、ユニークなものだったように思う。面白い作品だとも思っていた。また起きてからも覚えていたので、自分のセンスでは、あんな作品のような発想はできないと思ったものだ。だがそれは夢の世界のモノなのだから、自分の脳で生み出したものはずだ。なぜそんなふうに思うのだろうか。

夢の中で何かを考えている時もある。その考えている対象も、自

分の脳が生み出したモノではないのか？ 夢の世界が脳によって作られるのであれば、自分の脳が生み出した世界なのに、驚きや納得、関心の感情が出るのはおかしいではないかと思うのだ。

……ということは、夢の世界を作っているのは、自分が脳だと思っている部分ではない場所で作られているのではないだろうか。

別の場所で夢を制御しなければ、起こりえないことがたくさんあるのだ。

夢の中で、こうあればいいと願えばそうなるはずだが、ならない時がある。脳が夢のシーンを作成しているはずなのに、その展開が予想できないことがある。すなわち、例えると、脳にはサーバー管理者とゲームプレイヤーの両方いなければいけないのだ。

——信号を渡る。

夢の世界は自分の頭の中の自分の意識内に含まれない「誰か」によって作られている。それが夢という世界の中での現実であると仮定しよう。

では今現実だと思っている世界は何によって作られたものなのだろうか。

——車のクラクションが聞こえた。

全くわからない。

起きている世界「揺るがざる現実」と、寝ている世界「変幻自在な夢」は、何によって作られるのか。だが、僕らはその二つの世界を行き来している。

もしかすれば夢の世界はパラレルワールドの自分なのかもしれない。

全く不思議な話だ。

——その時、派手なブレーキ音と共に迫り来る何か体が襲った。赤いランプと灰色の金属と青い空が見えた。

向こうの世界のことについても考えておくべきだったと後悔した。

|| * || * || * || * || * || * || * || * || * ||

……今日は夢を見た。

どんな夢だったかも覚えていない。確か、怖い夢だったような気がする。だがこの記憶もすぐに失われてしまうだろう。

全く不思議な話だ。

硝子細工の御守

小刀

二月のある日の朝早く。この季節なら参拝客で賑わうだろう参道にも人の姿はなく、今日は平日だったなと思ひ出す。風がないおかげで少し暖かいけど、流石に退屈。手持ち無沙汰に雲の流れを眺めるのにも飽きたことだし、石段の掃き掃除でもしようかと物置へと向かう。

別に学校をさぼってるとか、そういうわけではない。三年の先輩たちが来週入試ということで、進路指導の都合上一年と二年は特別に休みてだけ。担任の先生は

「ちゃんと自習しておけよー」

と言っていたけど、宿題が出たわけでもないし誰がそんな言いつけを守るんだろうか。というか期末試験だつて終わつてるし、実質春休みみたいなものなんだよね。まあそれはともかく。

一通り石段の掃き掃除も終わり、一旦休憩する。お日様で程よく暖まった石段が気持ちいい。しかし三十分はかけたのに、一人もここを訪れた人はいなかったな。そんなに寂れてるわけじゃないんだけど——と思つたけど、鳥居が茶色を通り越して黒くなつてる時点で否定できないか……。頑張つて綺麗にしているのにな、年に一回。

屋代神社と呼ばれるこの場所は、結構昔からあるということ地元の人以外からも結構知られている。この辺り、お寺ならいっぱいあるけど神社はうちだけのはずだし。ちなみに御利益は商売繁盛、

安産祈願など色々あるんだけど、一番有名なのは学業成就。だから入試前のこの季節はお客さんが結構増えて、お父さんとお母さんが忙しくなる。アルバイトの人を雇う時もあるし、もちろん私も手伝うし。まあ去年は参拝客として、売り上げの増加に貢献したし——これ手伝いつて言えるのかな……？ 自分の縫つたお守りを自分で買うのは物悲しかったのは覚えてるけど……

「……おーい、朔(さく)良(ら)ー」

「……お父さん、どうしたの？」

物思いにふける、もといぼーつとしてたらお父さんが声を掛けてきた。やはり現職の神職ということか、装束がとても様になっている。ただその左手に電話の子機が握られているのはミスマッチだと思うけど。

「添田さんとの奥さんから電話。なんでも朔良を少し貸してほしいと」

ほれ、と子機を渡される、画面を見れば通話中ということ、特に何も考えず電話に出ることにした。

「お、お電話代わりました、夜代(やしよ)朔良(ら)です」

「もしもし、添田です。突然だけど、今日つて時間開いてるかしら？」

電話口から聞こえてくるのはまだまだ若さを感じさせる女性の声。この人、確か今年で四十二だったはずなんだけど。声だけじゃ分からないものだね。

「はい、特に用事はありませんが」

「ならよかった、ちよつとお願ひしたいことがあつてね。今が九時

だから……十時くらいにウチまで来てほしいの」

「はい……ちなみに、どのようなく用件でしょうか」

「それは桐子(とうこ)に話させるわ。まあそんな無茶な話でもないから。気楽に出来る話だしね」

「わかりました、では後ほどお伺いします」

「よろしくね」

ピツという音と共に電話は切れる。手持ち無沙汰だったのか箒を持っていたお父さんに電話を渡すと、箒を地面に置きながら尋ねてきた。

「どうしたんだ？」

「頼みたいことがあるからウチに来てくれって。暇だし桐(きり)ちゃんもいるらしいから行くね」

「わかった、粗相のないようにな」

「わかってるよ」

それだけ言い残して、準備の為に自室まで戻る。あれ、そういえば何か忘れてる気がするんだけど、何だっけ……まあ、いっか。

私の家が人と少し変わってるのと同じく、友人の家も世間一般からすると少し変わった経緯があったりする。添田ガラス工務店と言えば地元の人には伝わる、その名の通りガラスを中心に色々な品物を扱っているお店。窓ガラスを初めとして食器や風鈴は勿論、ガラステーブルや水槽など買う人がいるのか？ といった物まで。添という字が「添える」の他に「添う」とも読めることから、「ソーダガラス工務店」の通称で親しまれてたり。で、そんな所に何故私が

呼ばれたかという。

「早かったね、もつとゆっくりでも良かったのに」

「まあ暇してたし、こつちとしてもありがたいよ」

「……朔良は相変わらず、かな」

「桐ちゃんも、ね」

ガラス店の一人娘でもある、添田桐子。彼女がその理由である。自身も幼い頃からガラス細工に親しんでいたということで、商品の中に彼女の作品があることも珍しくない。その辺は私のお守りも似たようなものだけ。まあ高校に入ってから彼女とは仲良くなって、最近では家族ぐるみ、商売でもプライベートでも仲良くやっているという訳。

しかし普段は垂らしてる黒髪をこれまた黒のゴムで纏めてることから見るに、また何か作ってたのかな？ なら私を呼んだ理由は試作品の披露……にしては奥さんの言い方はしっくりこないかな。

「まあそれはそれとして、頼みたいことってなに？」

「そうだった。じゃあ……これ着て」

そう言われて差し出されたのは、彼女が着ているのと同じベージュのエプロン。普通の服だとガラスが熱くなったり欠けたりした時に危ないからってことで着ているのはよく見るけど……

「まさかとは思うけど、何か作れとか言わないよね？」

「え、言うけど」

「あ……」

大当たりである。私裁縫は得意だけど工作はむしろ苦手なのに。そんな雰囲気を感じたのか否か。

「詳しくは歩きながら説明する。無茶なことはさせないし、気楽に
してて」

「うーん、とりあえず聞いてから考える」

「その方がいいかな」

話もそこそこに彼女が歩き出したので、私も着いていくことにし
た。

「ガラスって木とか金属に比べるとどうしても割高になるし、危な
いってイメージがあるのは何となく分かる？」

「まあ、うん。綺麗っていうのは分かるけど、木とガラスの机があっ
たら私なら木を選ぶかな」

店の中を歩く二人。確かこつちには、手作りの風鈴とかビードロ
とかを作る工房があったはず。曰く桐もここで色々練習したそう
だ。ちなみに何故桐(とう)子(こ)を桐(きり)と呼んでいるかという
と、「どうこちゃん」だと略したとき「とうちゃん」になるのが嫌だと
言われたから。ところで桐子といえば切子細工って工芸品、沖繩か
どこかにあったよね。どこだっけ？

「結局、若者のとは言わずとも、人々のガラス離れて割と深刻な
のかって話になって」

「うん」

「じゃあそれをもっと身近に出来ればってなって」

「うん」

「簡単なガラス工作の教室でも開こうかって話になって」

「あー、それで『お試し役』に私が選ばれたと」

「そういうこと。朔良はどつちかと言うと不器用だけど、それでも
大丈夫なよう教えるし」

「何気に失礼じゃないかなー……」

事実だから否定できないんだけど、もう少し言い方ってものがあ
るんじゃないかな。

そんな話をしているうちに工房に到着。何を作るんだろうと思っ
たら、机に並べられたのはガラス板と定規に、先に硬そうな金属の
付いた棒と、グリップの先に円くて黒い輪つかみなのが付いた、
なにこれ？

「桐ちゃん、これ何？」

「ガラスカッターとデイスクグラインダー。お客さんのほとんどは
経験なんてないだろうから、とりあえず入門ってことで切断と研磨
を教えようかって」

「なるほど。ではよろしくお願いします、先生」

「……先生はむず痒い。まあ、早速始めようか」

「お疲れ、もつと苦勞すると思っただけど」

「ほんとに疲れたよ……こんなのいつもやってる桐ちゃんはすごい
としか。縫い物してる方がどれほど気楽かと、しかもなかなかうま
くないかないし」

「まあ最後の方は大分上手だったから、自信持っていいよ」

添田家の縁側にて、庭を眺める桐の隣にぐったり倒れ込む私。ずつ
と集中してたせいで頭も手も重い。

あの後、ガラスを直線に切ったり曲線に切ったり、切った跡を磨

いたり丸めたりと色んなことをやらせてもらった。曲線切りと研磨で瓢箪型の板を作れって言われた時には凄く苦勞したけど。

「桐子に朔良ちゃん、お疲れ様。朔良ちゃん的にはこの子の教え方どうだった？」

そこに桐のお母さんがお盆を持つてやってきた。乗ってるのは氷の入った麦茶が二杯。出してもらって言うのもって思うんだけど、季節間違えてないかな？

「ありがとうございます……普通に分かりやすかったです。最後の課題は結構大変でしたけどそれでもどうにかになりましたし」

「大変って？」

「これです、これをカッターとディスク、ディスク……」

「ディスクグラウンダー」

「それで作れという課題でした。半分くらいこれを作るのに費やした位なので」

「ふむ、ちよつと見せてね」

瓢箪板を手渡すと、まるで採点でもしているかのようにしげしげと観察される。正直恥ずかしい。その気持ちを飲み込むようにぐつと麦茶を呷ると、冷たすぎて頭が痛くなった。やっぱり季節間違ってますってこれ。

「ありがとう、はい。やっぱり初心者にはよく出来てると思うわ。それこそ磨けば光ると思うし、ウチに欲しいくらい」

「ガラスみたいなのに、ですか？」

「……」

「……」

「……ごめんなさい、悪気はなかったんです」

それこそ冷え固まったガラスのような空気。もう一回麦茶を飲むと思っただけど、さっき飲み干したばかりだった。空気が重い……と、そこで。

「すみません、電話かかってきたのでちよつと失礼します」

「気にしなくて大丈夫よー」

「ごゆっくり」

軽く会釈をして、歩きながら電話に出る。相手はお父さんだった。

「もしもし、どうしたの？」

「もしもし、まだ添田さんのところか」

「うん」

「すまん、ちよつと用事が出来てお母さんと出かけなきゃならなくなった。夕食までには帰れると思うんだが……」

「ん、分かった。何か適当に作って食べとくね」

「悪い、代わりに夜は美味い物買って帰る」

「気にしないで、それじゃあね」

電話を切る。今日は二人とも休みだった筈——ちなみに神職にも休みはあるよ、うちはこの季節だと忙しいけどそれ以外なら週休二日導入してるし——だから、久々に手料理でも振る舞おうと思ったんだけどな。まあ仕方ない……。

「お帰り、どうしたの？」

戻ってきたところに桐からの質問。まあ誤魔化す必要もないんだけどね。

「お父さんとお母さんに用事が入ったから出かける、家には誰もい

ないって」

「神社も大変なのねー」

「忙しそう」

「あはは……」

さて、今からどうしようか。正直今から帰っても暇なんだけど。なんてことを考えてると。

「そういえば朔良ちゃん、今日はお昼に何を食べるの？」

「うーん、久々に家族三人暇だったので和食でも作ろうと思ったんですけど。一人だけなら大したもの作る理由もないですし、適当にうどんでも思ってます」

「ならウチで食べていかない？ お手伝いしてくれたお礼もしたいし、桐子もいいわよね？」

「相手が朔良なら断る理由はないよ」

「というわけで、朔良ちゃんがよければどうかしら」

申し訳ないと思う一方、願ってもない話である。せっかくの提案を断る理由もないし、それに桐のお母さんは料理も得意だった有名だったはず。一人ぼつちは寂しいし……

「あ、それではお願いします」

「決まりね。じゃあ作ってくるから、桐子は朔良ちゃんの相手お願いね」

「勿論」

そう言い残して桐のお母さんは去っていった。ぽつんと残される私と桐。

「そういえば、さつき教えてくれたのって切る作業と磨く作業だっ

たけど、他は何があるの？」

「色々ある。穴開けや接着はもちろん、ある程度回重ねてから簡単な棚作りとか教えるつもり。言い出したらキリがないけど、日曜大工レベルくらいできれば立派な趣味になるしそのくらいで止める」

「やっぱり、敷居が高すぎると誰も来てくれないから？」

「そう」

「結構しつかり考えてるんだね」

「需要がないっていうのは死活問題だから。そっちとは違って、新規開拓が重要な割に難しいから」

そっち、とは神社のことだろう。確かにうちは地元の人から口コミでどんどん外に情報が伝わるし、受験生だって一年ごとに変わるから集客には困らない。その点彼女は大分苦労してるんだなーと考えてると。

「二人とも、ご飯出来たわよー」

「あつ、はい」

「今行くよ」

「いただきます」

お昼ご飯はおでんでした。素麺とか出てきたらどうしようと思ってたけど、流石にその辺は大丈夫だったみたい。縁側で少し冷えてた体に、熱々のタネが身に染みる。

「ちなみに、朔良ちゃんの好きな具って何なのかしら」

「やっぱり、こんにやくですかね。あのプルプルの食感が何より好きです」

「そして舌を火傷する、までがいつもの流れと」

「流石にそんなことは滅多にしないよ。ちなみに桐ちゃんは？」

「昆布巻」

「……だ、だいぶ渋いチョイスだね」

正直反応に困る。というかおでんとか鍋の昆布つてほとんど出汁が抜けてると思うんだけど、どうなんだろう。

「それにしても、去年まで入試でひーひー言ってた二人が後ちよつとで高二になるって考えると。月日の流れって早いなど実感するわね」

「確かに、あの時が夢みたいだなって思います」

「確かに」

「そして二年後はまた入試と」

「やめてください、もう少し夢の中にいさせて下さい」

「そもそも進路まだ考えてない」

「ちゃんと考えなさいよ。絶対うちを継げ、なんて言わないから」

「わかってる」

「朔良ちゃんもね。説教みたいになっちゃって申し訳ないけど」

「あはは……」

けど確かに、人によつてはもう大学入試まで考えてるんだろいうな。実際来週は先輩たちが入試になるわけだし、それを切っ掛けに自分たちも将来を考え——

「——あああ思い出したー！」

思わず立ち上がってしまった、お椀の中の出汁が零れてしまった。

「朔良、うるさいし行儀悪い」

「だ、大丈夫？ 何かあったの？」

その結果一人からは白い目で、一人からは心配そうな目で見られてしまう。

「ご、ごめんなさい」

一声謝つて席に着き、話を切り出す。

「桐ちゃんさ、ちよつと前、今までのお礼と入試前の応援つてこと先輩たちに何かプレゼントしようつて話したの覚えてる？」

「……今の朔良の反応に物凄く納得した」

一瞬呆けた顔になった後、またいつもの無表情で返事をする桐ちゃん。理解が早いのもつても助かるよね。

「確か今日私たち学校入れないし、明日は出発で明後日は二人とも現地入りしてるつて言つてたよね」

「会えるとしたら出発前、だけど明日は普通に学校があるから会えるとしてもその後しかない」

「具体的な出発時刻つて聞いてたっけ」

「聞いてない」

「そもそも先輩たちの電話番号知ってるっけ」

「知らない」

「……ねえ、これつて詰んでない？」

今日の今日まで忘れてた私にも責任はあるわけだけど、どうしよう。今から学校に行つても門前払いなのは目に見えてるし……。と悩んでいると。

「……大丈夫、まだ可能性はある」

「可能性？」

「とりあえず、それは後で教えるから何を作るかを先に考えよう」
 「分かったけど、なんで桐ちゃんはまだチャンスがあるって思ったの？」

「……方が一があるからヒントだけ。今年のお正月、二人は体調崩したせいでどこにも出かけられなかったって言った」

「え、それがどうヒントに？」

「答えは後で話す、とにかく今は何を作るかだよ。お母さん御馳走様、ちよつと工房に行くよ」

「あ、ごちそうさまでした！ 私も行ってきました！」

「お粗末様でした。二人とも頑張ってたね」

「何を作るか……私たち二人が渡すとしたら何が……」

工房に戻ってきた二人、けれどその表情は前よりも硬い。

「とりあえず朔良は神社のお守りか何かを二人用にアレンジするとかが手軽だと思う。私は何を作ろうか。ここならそれなりのものは作れるけど」

「……私はお守り、神社のお守りで桐ちゃんが工房、ガラス製品……お守り、ガラス……」

頑張って頭をひねってみるものの、全然いいアイデアが思い浮かばない。

「いつそ二つを合わせて、ガラスのお守りにでもする？ なんて冗談——」

——その一言に、頭の奥で何かが光った気がした。

「桐ちゃん。違う、添田先生」

「どうしたの、だから先生はむず痒いってさつき」

「さつき言ってたよね、まだ私に教えてないことはいっぱいあるって」

「うん、言った」

「……ガラスのお守り、ありだと思う。だから私に教えてください。それを作るのに必要な事を」

かつて彼女に対して、こんなに真剣に願いを乞うことがあつただろうか。私の覚えている限りではないはず。突然の要求に桐も初めは面食つてたけど、少しどころか大分呆れたように息を吐いて。

「朔良、敬語似合わない」

「なっ、第一声がそれってひどくない？」

「事実は事実。それに、そんなに畏まらなくても教えるに決まってるでしょう。ここはそのための工房なんだから」

今は、と付け足して彼女は棚を漁り始める。さつき見た機械、見たことのない機械、透明な板に色の付いた板と色々な物を取り出して。

「さつきより大分厳しくなるけど、付いてくる準備は良い？」

「もちろん！」

こうして、私の二度目の体験が始まった。

幽霊美術部。それが私と桐が入っていた部活の通称である。幽霊部員が多い美術部だから、というそのままの理由で付けられた不名誉なあだ名。実際、名簿上は十人近くいるのにもかかわらず、部室を訪れるのは僅かに四人だから否定はできないけど。で、その四人

というのが、

「こんにちはー」

「こんにちは」

「今日は早いな、何かあったのか？」

「もしかして、先生が早退したとか？」

私と桐、そして副部長の墨田先輩と部長の足立先輩である。足立先輩は墨と筆だけでキャンパスに世界を描き出す——和紙を買うお金はないらしい——水墨画をよく書いてて、墨田先輩は大きな木材から動物を彫り出すのが得意な——掃除が面倒だとも嘆いていた——彫刻活動をよくやってた。二人とも二年前から在籍しており、あまり人には知らせていないけど彼氏彼女の関係であるらしい。本人たちから聞いた。

ちなみにであるが、桐は家で作る製品を考えるとということでデザインナーをやっていたし、私は……裁縫って美術活動に入るのかな？

まあそういうわけである。

「よく分かりましたね、その通りです」

「すごいですね……」

「まああのオッサンが早退するのはいつものことだしなー」

「私たちの代だと十回はあったかしら」

人が少ないということもあって、私たち四人が話す機会はとても多く結果部屋はいつも和気藹々としていた。最初は無理やり勧誘させられたようなものだったけど、今では部屋に寄らずに帰るのが勿体ないと思う程。

だからこそ、私は——私たちは、こんな素晴らしい場所を与えてく

れた二人にお礼がしたいと、そう思ったのだ。

……忘れてたのは薄情だ、と自分でも思うけど。

「やっぱり疲れる……しんどい……」

おおよそ一時間の熱血的？ 指導によりひどくぐったりする私とそれを見下ろす桐。

「けど朔良、いくら裁縫やってるとはいえそこまで集中力持つのは意外だったよ。教室で教える予定だった技術は殆ど教えたけど、途中で二、三回休憩挟むつもりだったのに一回もなしで終わってる」「やっぱり、頑張ろうって理由さえあれば人は動けるんじゃないかな……？」

本音を言うと、この一時間を楽しいとはとても思えなかった。それでもここまでやりきったのは、恩返しをしたいという気持ちがあったから。ただそれだけなのだ。

「なるほど、あなたらしい」

くすつと微笑む桐。そういえば彼女が目に見えて笑うのは珍しいな、普段は殆ど無表情なのに。そんな視線に気づいたのか、彼女は一つ咳払いをして。

「それで、どうする？ 一人一つで別々に作るか、二人合作にするか」

「やっぱり二人合作にしたいかな。ばらばらっていうのはちよっと寂しいし」

「分かった、お守り自体については朔良の方が詳しいだろうから、形とかどのくらいの寸法がいいかとかを紙に書いてもらっていいか

な」

「もちろん！」

そこからはなかなか大変だった。

「朔良、意識飛ばならせめて機械止めて」

「ご、ごめん！」

私が疲れの余り寝落ちしかけたり。

「桐ちゃん、こっちは組み立てたよ！」

「分かった、じゃあ接合……何で接着剤切れてるの……！」

使おうと思った道具が壊れたり消耗品切れしたり。とにかくトラブルと言うトラブルを味わい尽くして、工房内には私たちの悲鳴が響き渡った。

そして、製作開始から二時間後。

「文字は彫り終えたよ。中にお札も入れたし……これで終わりかな？」

「まだ終わってないよ、最後の作業が残ってる。と言うわけでちゃんと穴開けるけど構わない？」

「え、なんで？」

「……下書きに書き忘れてたみたいだけど、お守りはちゃんと口を締めないと。御利益が逃げちゃうでしょ？」

「あ、ほんとだ」

「とういうわけで穴を開けて、紐を通して……完成つと」

「完成ー！」

透明なガラスに刻まれた「学業成就」の四文字、中に入れたお札

はすりガラスの原理で見えなくなっていて、その口は二人の好きな黒と白の紐でそれぞれ結ばれている。まさしく、世界に一つしかないお守りセットである。

「お疲れ……」

「お疲れ様、朔良にも自分にも。……どうにか四時には間に合った」

「あれ、何か言った？」

「何も」

「そっか」

工房を片付けながら、二人でお互いを労い合う。軽口を叩く余裕も出てきたところで、私はあの時の疑問をもう一度尋ねることにした。

「ねえ桐ちゃん、さっきの話だけど」

「何かしら」

「二人がお正月に出かけてないのと私たちが会える可能性ってどう繋がるの？」

「……え、まさか本当に分かってない？」

「分かってない」

「……分かった。答え合わせも兼ねて、二人の合格祈願に向かおうか」

「合格祈願って、どこまで？」

「屋代神社。ちよつと時間に余裕ないし、急ぐよ」

「……？ わかった」

まだ疑問が残るけど、とりあえず一回家に帰ることになった。

作ったお守りを持って帰途に就く最中。神社が見えてきた頃、急に桐が質問を始めた。

「二人が割と信仰、と言うか風習に対して人より熱心だったのは覚えてる？」

「うん、一応」

「じゃあ年が明けたら、日本人としてまずすることは？」

「うーん、日本人としてなら、初詣かな？」

「正解、だけど二人は体調を崩してたから初詣には？」

「行ってない……あ、もしかして——」

その後を言うことは出来なかった。石段を上った先、境内で手を合わせていたのは、私たちのよく知る人物。

「……さて、帰るか。千歳は何か食べたい物でもあるか？」

「うーん、寒いからおしるこか食べたいかな、もしくはぜんざい」

「どっちもそんなに変わらない——って、そこにいるのって」

「足立先輩、墨田先輩……」

「……お久しぶりです。話があったのですが、遅れてしまいました」

「そういうばこ、朔良ちゃんのご実家だったのね」

他ならぬ、足立先輩と墨田先輩だったのだ。

「んで、話って何だ？」

「えっと、あの、その」

「慌てなくて大丈夫、今日は私たち時間あるし」

「だつてき朔良。とにかく落ち着こう」

「はい……えーっと、お二人とも明日出発なさって、来週には入試

なんですよね」

「そうだな」

「緊張するね」

「つと、それで、それで……」

駄目だ、頭が真っ白になって言葉が出てこない。助けを求めて桐の方を見ると。

「……頑張つて」

投げやり過ぎではないですかね。もう半分自棄になって、叫ぶように言う。

「お、お二人の合格祈願と今までのお礼を込めて、お守りを作つてきました！ 受け取ってくださいっ！」

二人でお守りを差し出す。私が墨田先輩、桐が足立先輩にだ。

「ありがとう、つて凄いなこれ。確かに桐ちゃんの家はガラス屋だったけど、ここまでの物を作り上げるなんて」

「全くだよ。で、何か他に言うことは？」

「え、他に、ですか」

どうしよう、何も思い浮かばない。

「こういう時つてアレだろ、『実は先輩のことが好きでした』、とかいう場面——」

「足立先輩、墨田先輩が先輩の頭を捻り上げる前に撤回した方が良いかと」

「——というのは冗談に決まっているわけで」

ころころと言うことの変わる足立先輩、その後ろで彼の頭を抱えている墨田先輩。確かに怒った墨田先輩は怖い、と思っただけ言っ

たら私たちも捻り上げられそうだと黙ってよう。

「まあともかく。二人とも、ありがとうな。俺たちのために」

「本当に、どうもありがとう」

「はい！」

「どういたしまして、ですな」

真面目な空気に戻り、不意に寂しさが込み上げてくる。多分もう少ししたらお別れなんだろうな。なんてことを思いながら。

「まあ何か気の利いたことを言えるわけでもないが……そうだと、最後に一つだけ」

「はい」

「何でしょうか」

「俺たちは頑張る。お前たちも——無理せず、頑張ってくれ、それくらいか」

「いつか会えるかもしれないし、会えないかもしれないけど。この一年間はとても楽しかったよ。朔良ちゃんも桐ちゃんも、美術部（あそこ）をよろしくね」

「……はい！」

「もちろんです」

最後にそれぞれ握手を交わし、二人は神社を去った。参道には、私たち二人だけが残される。

「終わっちゃったね」

「うん」

「今日一日、……色々、あったけど。たのし、かった、ねっ」

「……うん」

全部終わった安堵からか、別れの切なさからかは分からなかったけど、私たちは涙した。二人で肩を抱えて、声を上げて泣いた。誰かに見られることもなく、ただ二人で。

そして、十分くらいが経っただろうか。

「……帰ろっか」

「そうね、朔良の家はここだけど」

「あはは、そうだね」

「……」

「……」

再びの沈黙。しかし考えていたことは共に同じだったようで。

「合格するのいいね、二人とも」

「うん……もう一回、お祈りしておこうか」

「そうだね」

境内に立ち、五円を投げて二拝二拍手一拝。願わくば、二人の努力が報われてくれますように——

了

イラスト



illustration : Cloude





ぶっちー

2016

申



謹んで新春の
お慶びを
申し上げます
申



クロム

あとがきのようになにか

どうなることかと思った冬会誌、完成して少しホッとしております。

まえがきで出てきたえらいひとの wolf です。

現視研で新しいことがしたい、という思いつきではじめてしまった企画だったので途中で頓挫するかと思ったのですが、これも参加してくれた部員の皆様のおかげです。

今回も秋の会誌に引き続き編集にはフリーソフトの「威沙」を使わせてもらっています。

「威沙」の製作者さんに感謝 m(=)m

ネットで公開するんだからリテラシーを守れとか人が集まらないんじゃないのかとかいろいろ言われたり議論して大変だったのですが、それは置いて

こんなネットの辺境にある高専生が作った会誌のあとがきまで読んでいただけることは非常に嬉しく思います。ここまで読んでいただきありがとうございます。

でもいいので感想を貰えると嬉しいです。

・
・
・

書くことがなくなった

・
・
・
うゝむ…他に書くことが…

ついでになんでもいいので感想とか「見たよー」とかを twitterとかホームページにでも書いていただけると作者が「ウッヒオヒョオオオオオオオオオオオオオ！」と叫びながら狂喜乱舞するのでなん